

前橋市社会教育ビジョン（仮称）

中間とりまとめ報告書

学びが循環し、「関係を耕す」まちへ

令和8年3月31日

前橋市社会教育アドバイザー会議

目次

1. ビジョン策定の背景と「羅針盤」としての意義	1
2. 社会教育の再定義：土壌を「耕す」営み	1
① 「土壌を耕す」営みとしての社会教育	1
② 社会の「信任基盤」の構築	1
3. 深化する価値観：ウェルビーイングとコンパッション	2
① 「協調型ウェルビーイング」への転換	2
② 「コンパッション（慈しみ）」という原動力	2
4. 前橋市の課題「現状認識」	2
① 団体の「島宇宙化」と寛容性の不足	2
② 「体験格差」と「関係の格差」	2
③ 「タイパ・コスパ主義」の浸透	3
④ 支援の届かない「空白の層」	3
⑤ 標準形社会の終焉	3
5. 若者の内発性を引き出す鍵	3
6. 前橋の強みと社会実装の柱	4
① 地縁の力（自治会加入率の高さ）	4
② 豊かな「教育資源」の多層連携	4
③ 「開かれた学校」のモデル構築	4
7. 具体的なアクション：学びの循環をつくる仕組み	4
8. 10年後の前橋が目指す姿（ビジョン）	5
9. 次年度に向けた具体的な検討事項	5
資料	6
前橋市社会教育アドバイザー会議委員（敬称略・五十音順）	6
令和7年度 前橋市社会教育アドバイザー会議 会議日程	6

1. ビジョン策定の背景と「羅針盤」としての意義

現代社会は、5年先の予測すら困難な「地図のない時代」にあります。これまでの行政計画に多く見られた「数値目標の達成」を目指す「目標達成型」の計画では、刻々と変化する市民のニーズや社会情勢には対応が困難です。

本ビジョンは、特定のゴールへ市民を誘導するものではなく、不確実な時代の中で一人ひとりが進むべき方向を見出すための「羅針盤」としての（換言すれば北極星のような）役割を担います。市民が「自分にとっての幸せ（ウェルビーイング）」を問い続け、他者との関わりの中で自らの人生をデザインしていく。そのための確かな指針を示すことこそが、本ビジョンの本質的な意義です。

2. 社会教育の再定義：土壌を「耕す」営み

① 「土壌を耕す」営みとしての社会教育

本会議を通じて、社会教育は「特定の知識を教える場」から、「人と人とのつながり、関わりの土壌を耕す営み」へと再定義されました。

- ・生涯学習（縦軸）：個人が一生を通じて自ら歩む学び。
- ・社会教育（横軸）：その学びを支え、人々の関わりやつながりを育む社会的な基盤。

この「横軸」である社会教育が豊かであればこそ、市民は安心して自らの学びを深めることができ、その成果が再び地域へと還元される循環が生まれます。

② 社会の「信任基盤」の構築

教育の本質は、単なる課題解決ではありません。「社会として良い状態」を育てることが社会教育の役割です。誰かと共にある経験や「ありがとう」が循環する関係性が、人々の自尊感情・自己有用感を底上げします。学び合うことで自分の人生が肯定できる、という経験を通じて「この社会は信じられる場所だ」と思える「信任基盤」をつくることにつながります。社会教育が充実していることは、市民が「自分はこの社会に必要とされている」という感覚を持つための基礎となります。

3. 深化する価値観：ウェルビーイングとコンパッション

① 「協調型ウェルビーイング」への転換

本ビジョンでは、個人の努力で幸せを勝ち取る「獲得型（欧米型）」ではなく、他者との関わりの中で自然に良い状態になる「協調型（日本型）」ウェルビーイングを重視します。「ありがとう」と言い、言われる関係性。自分の存在が認められ、誰かの役に立っているという実感。こうした「関係性の中にある幸福」を、社会教育の手法を通じて地域に実装していきます。

② 「コンパッション（慈しみ）」という原動力

他者と分かりあうために必要とされる「共感」をさらに一歩進め、他者の苦しみや悲しみを自分事として捉える「コンパッション（compassion）」の力を、市民の主体的な行動の源泉として位置づけます。外発的な動機づけ（義務感や報酬）ではなく、内発的動機（充実感や自己実現）から生まれる学びや活動こそが、持続可能な地域社会を支えるエネルギーとなります。

4. 前橋市の課題「現状認識」

① 団体の「島宇宙化」と寛容性の不足

文化団体や公民館サークルにおいて、他団体の活動には無関心である「島宇宙化」¹の現象が見られます。既存の枠組みが「排他的な居心地の良さ」²に陥っていないかを見直し、他者や異なる価値観を認め合う「寛容性」や、活動同士の「のりしろ」をつくることが求められます。

② 「体験格差」と「関係の格差」

育った環境による「場慣れ」や体験の差が、社会で生きていく力に大きく影響する「体験格差」が指摘されました。また、孤立している人ほど学びから遠ざかる「関係

¹ 共通の価値観をもつ集団に分断し、それぞれが関わりをもたず独立した状態。いわば”内向き化”した状態。

² 外部の視点を入れずに自分たちの価値観だけに閉じこもった状態、または閉じこもって得られる安心感。

の格差」も深刻です。地域の資源（公民館、図書館、芸術文化施設、大学等）を横につなぎ、誰もが体験にアクセスできる「機会の保障」が必要です。

③ 「タイパ・コスパ主義」の浸透

現代社会は、効率を重視するあまり、回り道や対話を無駄と切り捨てる傾向があります。これは、時間対効果（タイパ）や費用対効果（コスパ）を過度に重視する考え方が背景にあります。

しかし、社会教育における「一見無駄に見える時間（井戸端会議や雑談）」こそが、深い気づきやウェルビーイングを育みます。タイパ重視の若者であっても「自己有用感」があれば情熱を注ぐことが語られており、効率性とは別の価値基準を提示することが重要です。

④ 支援の届かない「空白の層」

子育て世代やアクティブシニアに比べ、独身者、現役世代、若年層へのアプローチが不十分です。既存の公民館の枠組みを超え、職場やオンライン、あるいは新しいプラットフォームとの連携により、学びを「待つ」のではなく「届ける」アウトリーチの強化が課題です。

⑤ 標準形社会の終焉

既存の制度が想定してきた「標準的な人／家族」前提が崩れ、多様性が常態化しつつあります。高齢化・障害・外国人住民を含む共生の前提で、学びと関係の再設計が求められます。

5. 若者の内発性を引き出す鍵

若者へのヒアリングを通じて、彼らが「学び」や「活動」に求めているのは、教育的な指導のみに終始しない「楽しさ」と「自己有用感」であることが分かりました。

- ・「遊び」を入り口にするすることで、意図しない多世代交流や気づきが生まれます。
- ・ゆるさと安全性： 強制されない「ゆるさ」と、行政が後ろ盾となっている「安全性」のバランスが、若者が安心して一歩踏み出せる環境条件となります。
- ・回り道の肯定： 挫折やギャップイヤーを「資産」として捉え直す文化を育むことで、「やり直しを肯定する街」としてのブランドを確立できる可能性があります。

6. 前橋の強みと社会実装の柱

① 地縁の力（自治会加入率の高さ）

全国平均を大きく上回る前橋市の自治会加入率（約 85%）は、社会教育を展開する上での最大の優位性です。このネットワークを管理のための組織から「学び合うためのプラットフォーム」へとアップデートし、学校や地域学校協働本部と結びつけることで、前橋独自の展開が視野に入ります。

② 豊かな「教育資源」の多層連携

16 の公民館、図書館、文学館、美術館、そして6つの大学が揃う「学園都市」としてのリソースを、「点」から「線」そして「面」へとつなぎ合わせます。企業研修やNPO活動も社会教育の一部と捉え、広く「社会教育的な視点」を持つことで、前橋市全体を「学びのキャンパス」化します。

③ 「開かれた学校」のモデル構築

学校施設を「学校だけのもの」にせず、地域の大人が関わり、放課後や休日にも活用する「地域の学びの場」としての開放を推進します。部活動の地域移行を含め、子どもたちが地域社会という「海」にそっと投げ込まれ、試行錯誤から「泳ぎ方」（生きる力）を体得できるように、多様な大人たちに支えられて成長する仕組みをつくります。

7. 具体的なアクション：学びの循環をつくる仕組み

ビジョンの実現に向けて、以下のアクションを重視します。

- ・「私たちが」という主語： 行政が「してあげる」のではなく、市民が当事者として「私たちはこの街でどう生きたいか」を語り合えるメッセージ構成。
- ・小さな実践のウェブ（網状）化： 地域での活動事例が見える形で共有することが必要です。「ありがとうが増えた」「地域での役割が見つかった」等の定性の証跡、地域に点在する小さな物語（ナラティブ）を可視化し、それらをつなぎ合わせてセーフティーネットを構築します。

- ・伴走者（社会教育士等）の配置：市民のやりたいことをサポートし、地域の資源と人をつなぐ「コーディネーター」としての専門人材を重視します。

8. 10年後の前橋が目指す姿（ビジョン）

本ビジョンを通じて、前橋市は「誰もが自分らしくいられ、学びを通じて社会の信任基盤が編み上げられていく街」を目指します。学びというライフラインが整ったとき、前橋は「何が起きても落ち着いていて、変化に動じない(多様性を受け入れる)」強くしなやかな土壌を持つ街となります。

「学び」という言葉が特別なものではなく、日常生活の中にある「気づき」や「ありがとう」の連鎖として定着したとき、前橋の未来は市民の手によって、より豊かに耕されていくでしょう。

9. 次年度に向けた具体的な検討事項

・「学び」という言葉の再定義

学校的な学びを超え、生活そのものの中に存在する多様な学びを、どのように価値づけ、社会教育として言語化していくかについて検討が必要です。

・アウトリーチ(空白層へのアプローチ)

独身者、現役世代、若年層など、現在社会教育と接点がない層に対し、どのような方法で「届ける」ことができるのか。職場やオンライン、サードプレイスの活用など、具体的な仕掛けについて検討が必要です。

・公共施設(公民館等)の機能を再考

目的がなくても立ち寄ることができる、市民の「居場所」としての機能を、今後どのように強化していくか。そのための仕組みづくりを検討する必要があります。

・「ライフラインの一つとしての学び」の議論を深化

学びやつながりを、生命を維持するインフラと同様に「学び合い、助け合える網目(セーフティーネット)」として地域に張り巡らせるための意義と推進方法について、次年度に向けて協議をお願いします。(教育長総括)

資料

前橋市社会教育アドバイザー会議委員（敬称略・五十音順）

氏名	団体名・役職	備考
井 熊 ひとみ	特定非営利活動法人 教育支援協会北関東 代表理事	
佐 藤 博 之	前橋市文化協会 会長	社会教育委員会議 議長
牧 野 篤	大正大学地域創生学部教授、東京大学名誉教授	【委員長】
茂 木 勇	埼玉工業大学人間社会学部教授	社会教育委員会議 副議長

令和7年度 前橋市社会教育アドバイザー会議

回	期日	協議等の内容
第1回	令和7年10月1日（水）	委嘱状交付、委員長選出、作成の目的説明
第2回	令和7年11月8日（土）	成果物の紙面構成イメージ、スケジュール及び工程、委員意見交換
第3回	令和7年12月23日（火）	前橋市における社会教育ビジョン策定の意義とその具体化について
第4回	令和8年2月4日（水）	ビジョンの策定に向け、社会教育とは何か、必要性、市民の学び合いの充実について 今後のアドバイザー会議の進め方
第5回	令和8年3月4日（水）	市民の学び合いをどのように充実させるかについて（継続協議）
個別打ち合わせ（会議の進め方の打ち合わせほか） 令和7年10月17日（金）、10月31日（金）、11月21日（金）、12月1日（月）、 令和8年1月14日（水）		

■事務局 前橋市教育委員会事務局生涯学習課

